



# 羅針盤

2015年度 第1号  
都立豊多摩高等学校  
進路図書部

らしんばん 2015 (平成27) 年4月15日 (水) 発行

「羅針盤」は、豊多摩高校の進路だよりに継承されてきたタイトルである。辞書的には「船舶や航空機に備えて方位・進路を測る装置」だが、もちろんここでは隠喩。人生を旅にたとえるならば、進路を決めるための羅針盤が必要ということになる。

## こころの羅針盤

「羅針盤」といえば、**なだいなだ**の文章を思い出す。なだは、一昨年亡くなった作家で精神科医だった人だ。彼は、かつて治療したアルコール依存患者との会話が忘れられない…。

かれは小学校から大学まで優等生だったという。つまりエリートコースをずっと歩んでいた男だった。

患者としても優等生だった。医者のおぼくのいうことは、ぼくの書いた本などで読んでいる様子で、全部覚えている。話を途中で遮って、その先はこうでしょう、と先回りして得意げだ。病院の規則はよく守り看護婦のいうことは素直にきき、そして職員にも協力的である。ところが、退院させてやると、直ぐに酒を飲んで、病院に逆戻りだ。それをこれまで十何回も繰り返していた。

「こんな優等生の患者が、外に出るとなぜ一日ももたないのだろうか」

と首を捻ったら、かれから、

「優等生だからですよ。患者としてばかりでなく、小学校から大学まで優等生でした」

という回答が直ぐに返ってきた。ぼくは頭を上げてかれの眼を見つめた。

「優等生だから？ それはどういうことかね……」

ぼくはおしまいまでいえなかった。かれが遮った。

「優等生だったのがいけないというのですよ。優等生なんて、なるのは簡単ですよ。でもドクター、あなたには優等生は難しいでしょうね」

あまりにも、凶星だったから、鼻白んで尋ねた。

「どうして分かったの？」

「頭が悪いから、なんて失礼なことはいけません。なれる頭を持っていてもなりたがらないからです。先生は、面白い小説読み始めたら、試験の前の日でも、止められないでしょう」

「その通りだが」

それで何度か追試を食らったことがある。

「優等生になるには、小説など読んでいてはだめです。試験範囲の復習を、3度でも4度でもする。何しろ1番でも上に行く競争ですからね。先生はそんなのに価値を感じないでしょう。試験なんて、すれすれで及第すればそれでいい。暇があれば、できるだけ決められた以外の勉強をしたい、そう思っているでしょう。優等生は決められた勉強をして一点でも他人の上に行く競技をやって、1番だ、2番だ、と数字を誇りにする。才能のある優等生は別です。余裕を持って1番になるから、あちこち手を出せるけど。でもぼくのような優等生はダメです。決められたことをやることになれるうち、自分で選んで、自分で決断することが出来なくなる。いわば太平洋の真ん中に行くために必要な**羅針盤**がこころに作られていない」

(『ふり返る勇氣』(筑摩書房、2006) 84~86頁)

なだは彼の視点から、「こんなに気持ちに余裕のない青年時代」を送らなければエリートになれない風潮を嘆いている。が、この話が忘れられないのは、二重に耳が痛いからだ。私たちは、彼ほどの読書家ではな

いし、この患者ほど勉強をしたわけでもない。だから、作家にも、医者にも、キャリア官僚にもならなかった。

そう、この患者はキャリア官僚だったようである。よほど印象に残ったらしく、なだは、「心に残る患者さんの話がありますか」と聞かれたインタビューでも、この患者との会話を紹介している。

件の患者が「みんなが1度復習するところを1度復習しても1番になれない、優等生は競争相手が2度復習してるなら3度復習する」と説明するので、なだが「じゃあ復習しかしてないじゃないか」とケチをつけると、「割り切ってそうできない人間は優等生になれないですよ。決められたことでみんなが競争していると思ったら、他のことなんか手を出せない」と応える。

なだは、その時の患者の心理状態を、「一種の強迫観念だね」とふり返る。

#### ——（聞き手）なるほど

「でも、社会に出ると違うんだ」って。優等生は部屋の真ん中に行くようなものだって。4畳半なら前後左右を見て、「このへん」と思えばだいたい真ん中。6畳でも8畳でも100畳でも。しかし太平洋の真ん中へはどうやって行けばいい？ どうしていいか分からない、羅針盤がない、と言う。自分の人生を自分で考えて、それにいい勉強は何かっていう勉強をしてこなかったって。「あきらめるのは早い。これからやればいい」って励ましたら、「先生の本に30歳までに自我を確立しないとだめだって書いてありました」って。「あんなのはロクでもない本だ」って言ったんだけど。

#### ——その後、その人は

退院の時、彼の後輩が私の意見を聞きに来た。キャリアはみんな春に人事異動があるが、彼だけ遅れたら絶望してまた酒を飲むかもしれない。上げてやった方がいいのではと。「馬鹿な。遅れたら遅れた。現実を受け止めるようにしないと」って意見を述べた。周りがだめにしているんだな。私なんか乗せてくれない、院長用のような車を回してきた。本省の課長さまのご退院だからってね。「歩いて帰れ！」って言ったけど。結局だめだったねえ、その人…。

（「人生の贈りもの—羅針盤ない優等生の苦悩—」聞き手・友澤和子、朝日新聞夕刊07/12/06）

なだの思いはもちろん「こころの羅針盤が大切だ」ということだろう。

が、患者の言い分にも一理ある。「みんなが1度復習するところを…3度復習する」というのは、確実な学力を身につけるうえで、的確なやり方だ。いたずらに手を広げてはいけない。繰り返しが結果につながる。

ただし、それが人生のすべてだと考えたら「一種の強迫観念」に囚われる。そうならないために必要なのが「こころの羅針盤」というわけだ。それでは、「こころの羅針盤」で何だろう。

たぶん、人によって生きる意味や目的が違うように、人によって違うものだろう。自分のやりたいことを見つける力。右顧左眄せず、自分の道を切り拓く力。コピーもマニュアル化もできない。曖昧模糊としているのに、明らかに持っている人がいる。イチローや宮崎駿、山中伸弥、大場満郎…。彼らのことばや生き方は、「こころの羅針盤」を手に入れるためのヒントになるに違いない。

豊多摩の生活の中で、君が君じしんの「こころの羅針盤」を手に入れることを願っている。

私たち進路図書部は、学級担任や教科担任とともに、君が、着実に学力を身につけ、「こころの羅針盤」を手に入れて大海に旅立つまでのサポートにあたる。

### 進路図書部—本年度の係分担

飯泉（世界史）	進路指導全般・就職・公務員	深田（英語）	推薦・模擬面接
草野（化学）	センター試験・貸出図書・校外模試	三浦（日本史）	実力テスト・ビデオ講座
坂口（地理）	奨学金・各種調査	昆（司書）	図書購入・図書館管理
塚原（国語）	看護医療系・羅針盤	小山（国語）	図書館管理